

夭折の漢学者 石津発三郎

竹中 友里代

1. 山伏山町の古文書から

山伏山町文書には、山伏山町の年寄で、議事者である孫兵衛宛に出された常帯刀届の綴がある¹。明治2年(1869)6月に作成されたこの文書には、小田善右衛門・七條左京・石津発三郎と丹州龜山藩家来2名の止宿人が届けられている。七條左京は、運慶以来の伝統的作風を代々伝えた京仏師の名家であるが、石津発三郎からの提出文書は次の通りである。

口上覚

一慶応四年戊辰年四月に会計官貨幣局江在勤之節、常帯刀被 仰付候処、貨幣局御廃止後、当二月に出勤司附属に相成、東京元金座跡御用仕候に付而者は迄通、常帯刀被 仰付罷在候間、此段御届申上置候、以上

石津発三郎

代時三郎(印)

山伏山町

年寄

議事者孫兵衛殿

明治新政府は幕府の旧金座を接收し、慶応4年(1868)4月より引き継いだ会計官貨幣局に石津発三郎は勤めており、その時には常帯刀を許されていた。貨幣局が廃止され2月から出勤司付属となっても東京にて引き続き金座の御用を勤め、帯刀もこれまで通りであるという。この綴には、同町の小田善右衛門の代理人小田七右衛門からも同様の貨幣局在勤と帯刀届があり、石津と小田は同じ貨幣局・元金座職人であった。

2. 山伏山町での石津家

石津発三郎は、天保14年(1843)5月28日山伏山町に生まれ、灌園、子節または子儉、初名は賢勤と称し、幼少より学を好み梶村駟堂²に句読を習った。父の石津賢教・八右衛門は、京都金座の役家を勤めていたが、安政4年(1857)頃に亡くなり、発三郎は同年6月に父の名跡を15歳で相続し、間もなく江戸に召されて金座に従事した。生来の学問好きにより江戸では儒者の萩原西疇や田口江村³に学ぶ。この口上書が提出された明治2年は、発三郎は、維新後もそのまま東京にとどまり、山伏山町へ一族の石津時三郎が代わって提出したものである。

石津家は、安永2年(1773)10月に先祖石津八右衛門が山伏山町に屋敷地を買得した⁴。明治期の町内絵図によると⁵、発三郎の家屋敷の所在は、室町通り蛸薬師下ル山伏山町の西側、第12番戸、553番地で、現在の明倫自治会館(祇園祭山鉾連合会事務局がある)・元明倫幼稚園付近である。明治3年「券状控」では、東が道に面し、表口5間3尺7寸、裏口8間4尺8寸、奥行き31間1尺5尺6寸で、およそ56mあり所謂鰻の寝床状である。表から13間半程奥まったところに高塀があり、その西側に土蔵2ヶ所に母屋の居住空間がある⁶。蛸薬師通に面した東側の土地は空白であり、表は借地として店貸していたのであろう⁷。石津家は、山伏山町文書に借屋の家主としてしばしば登場する。

石津家の家職金座は、江戸時代幕府の小判・一分判鑄造所であるが、京都には元禄以前から姉小路車屋町に金座として後藤庄三郎役所があり、金銀の改めや小判・一分判の鑄造にあたっていた。江戸・佐渡・京の三ヶ所に置かれた金座は、元禄永永頃には、江戸詰は20名、佐渡では13名、京では手代10名に、その配下の小判師が40名あり、その中に石津平左衛門の名がある⁸。金座人はすべて勘定奉行の配下で、金座人の長である年寄役、勘定役、平役という職階があり、例えば年寄役の実子は15歳になるとまず平役に召出され、年齢に応じて累進する⁹。15歳の石津発三郎も家職習得のために江戸へ向かったのであった。明和年間には京都小判師6名、勘定役9名、平役24名の中に小田善右衛門と石津平左衛門の名がある。また金座人及び吹屋棟梁は、各自が鉄製の検極印を所持し、小判裏に検極印を押してはじめて通貨として発行される。寛政年中改正後、京都金座人は10名となり、検極印を所持する石津発三郎と小田善右門は、「」と「」の印形の記録がある¹⁰。山伏山町の両家は、代々京の金座の職人家であった。

3. 編纂事業の足跡

石津発三郎は、明治2年11月15日公家の平松家に召し抱えられ、翌明治3年閏10月五条橋東2丁目東組の橋永武兵衛の妹たか18歳を娶り¹¹、一家を構えたので、この頃には京都へ帰っていたのであろう。一方小田善右衛門は、明治6年1月27日貨幣改所を辞している¹²。

明治7年3月18日石津発三郎に対して至急上京の命があり、太政官三院の内中枢機関である正院の史官に出仕し、明治政府の正史編纂事業にあたったが、1年満たず明治8年1月に辞している。明治8年3月京都府の当分雇にて沿革調査掛の出仕を、同年12月には当分雇の府史編集を命じられ、翌明治9年3月には、少属となり庶務課簿書掛で、府史の編集を命じられている。同年8月には府史編輯専任となり、七等属官として府史地誌編纂にあたっていた¹³が、明治13年6月多病により辞した。また本願寺の学校創設に関わり、漢学教授となる。本願寺を辞して後、家にあって著作に日々を費やしていた¹⁴。

「府治誌稿」¹⁵は、明治14年(1881)北垣国道の命があり、府治沿革志編纂事業で整理された稿本であるが、編集は湯本文彦と石津発三郎が担当し、湯本文彦は「管轄志・京都古来沿革考・学事志・社寺志」を、石津は「職務志・衛生志・土木志」を分担することになっていた。明治24年より着手し資料収集して編纂にあたっていたが、同年8月29日に石津が48才で没した。明治26年平安遷都事業により中止となり、稿本は未完となった。

4. 漢学者石津の活動

石津は、著作には灌園の名を用い、各地の漢学者らと交流があった。古書熟読を友とする者が「印須社」を結成し、毎月27日午刻から酉の刻に参会し、設定した課題や持ち寄った詩文を批評し合う。印須社のメンバーには、石清水八幡宮の社人で、京で私塾をひらく漢学者山田樸東や岡本黄石、菊池三溪、頼三樹三郎の兄頼支峰、医者であり儒者でもあった江馬天江、高槻藩士で漢詩に優れた市村水

香、文人画家の村田香谷等があった。その著作合わせて文 26 編・詩 184 首を明治 6 年に刊行したのが『印須社詩文』¹⁶で、石津は文 2 編に詩 3 首を掲げている。山田樗東は、新政府奉職者に八幡の知識人として推薦されるが、高齢を理由に上京を辞している。岡本黄石は、彦根藩家老で桜田門外の変後、藩政に復帰し戊辰戦争で朝廷側に立たせている。菊池三溪は、和歌山藩儒者で後に京都に私塾を開き、石津は菊池を文人の雄に上げている。『灌園遺稿』には、菊池三溪が著した『続近事紀略』や『香谷山水帖』・『黄石斎集』があり印須社メンバー等に序文・跋文を認め、その目録には 37 を数え、多くの文人との交流を示す。また序文には、重野安繹^{しげのやすつぐ}が寄稿している。歴史学者で漢学者である重野は、明治政府の文部省修史局員、東大に国史学科を設置、実証主義の歴史学の基礎を築いている。短い期間であったが石津が東京の修史事業に関わった時期に知己を得たものであろう。

灌園の人となりは「温厚清淑にして子弟を諭すに道德を以てした」という。その徳風は世に知られ、かれを慕う門人には詩文を課し、才芸を奨め教養した。京都滋賀の師範学校や慶應義塾の漢学教授として成功した矢野直如^{やのちよくじょ}は、灌園の門弟の一人である¹⁷。弱冠の頃の直如は、石津が尊敬してやまない菊池三溪や江馬天江らに詩文を学んだが、後に石津の気質を慕い入門したという。京の山伏山町の金座職人家が輩出した石津灌園は、漢学者・歴史学者として京都府知事榎村正直にも府史編纂事業に招かれ、嘱望されるも夭折したことが惜しまれる。

【注】

- 1 山伏山町文書 引出 5-294
- 2 平安人物志(嘉永 5 年版)、四条膏藥辻の儒者梶村高朗(号は李北、字名は伯令、俗称梶村謙吉)のことか。
- 3 萩原西嶸は、文政 12 年(1829)～明治 31 年(1898)、幕末～明治時代の江戸の儒者。明治元年伊予(愛媛県)今治藩につかえ、のち太政官に入り外交史などを編修。名は裕。字は公寛、好間。通称は英助。田口江村は、幕府儒者、備前の人。
- 4 山伏山町文書 引出 5-247
- 5 山伏山町文書 引出 5-217・218
- 6 山伏山町文書 引出 1-11・箱 2-119
- 7 山伏山町文書 箱 1-202・箱 2-192・194・217・箱 1-182
- 8 『京都御役所向大概覚書』下巻 144 頁「十二」金座之事。大貫摩里「江戸時代の貨幣製造機関」(金座、銀座、銭座)(日本銀行金融研究所『金融研究』18 巻 4 号 1999 年 9 月)
<https://www.imes.boj.or.jp/research/abstracts/japanese/kk18-4-1.html>
- 9 塚本豊次郎『日本貨幣史』財政経済学会、1923 年
- 10 鈴木俊三郎『金座考』財政経済学会、1923 年
- 11 山伏山町文書 箱 1-77・79・引出 1-11
- 12 山伏山町文書 箱 1-105
- 13 京都府行政文書「庶人登庸録」・「官職進退」「京都府職員録」京都府立京都学・歴彩館蔵。
- 14 明倫尋常小学校『明倫誌』、昭和 14 年。『灌園遺稿』乾「灌園石津君伝」石津儀一、1897 年、国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/893495>。小林丈広「『平安通志』編纂と歴史学」『京都における歴史学の誕生』ミネルヴァ書房、2014 年
- 15 「府治志稿」行政文書 京都府立京都学・歴彩館蔵
- 16 『印須社詩文』明治 6 年 9 月出版、国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/892586>
- 17 矢野直如『直如遺稿』明治 24 年、西尾市岩瀬文庫蔵